

平凡こそ非凡

原節子は今世界中の映画監督から最も注目されている女優といえるだろう。

小津安二郎監督の作品で原節子が演ずる女主人公に共通する役名を取って「紀子のりこ三部作」と呼ばれるシリーズの



時代と国境を越えて普遍的な共感と呼んだ小津安二郎監督の「東京物語」（1953年・松竹提供）。茶の間でかいがいしく義父母（笠智衆、東山千栄子）の世話をする亡き次男の嫁（原節子＝中央）。戦死した夫の遺影が戸棚の上に見える。

最終作「東京物語」は2012年、英国映画協会発行の映画専門誌「サイト・アンド・サウンド」が10年に1度発表する「世界映画史上ベスト作品」で世界中の映画監督358人による監督選出部門の第1位に選ばれた。それまで長く首位を独占してきたオーソン・ウェルズの「市民ケーン」を2位に抑えてトップの票数を獲得したのである。ちなみに846人が参加した批評家選出部門の1位はヒッチコックの「めまい」、2位が「市民ケーン」で「東京物語」は3位だった。両部門の間に生じた差は、同業の映画監督ほど映画史に類のない小津の独特なスタイルに畏敬の念を強く抱くからに違いない。

小津の作品は現在の世界映画の流行とは正反対の場にある。暴力、殺人、破壊、炎上、スリル、サスペンスなどの「映画的」な要素とは無縁で、非日常的な出来事は一切起こらない。描かれるのは平凡な家族の平凡な日常ばかり。

撮影機を常に低い視座（ローポジション）に固定し、使用するレンズを標準の50ミリ1本だけに限って、対話する人物の座像をそれぞれ正面から捉えてカットバック（切り返し）を繰り返すのが基本の文法だから、同じような構図が続く場面が多いが、実はこの「繰り返す」こそが小津映画の真骨頂なのだ。

人間の本当の幸福は平凡な日常の平凡な繰り返すの中に隠されている、というのが小津の信条である。その考えが的を射ていたのは、今混迷を極めて何が何だかわからなくなっているシリア情勢と、長年住み慣れた土地から追われて、欧州に向かった難民が直面している悲惨な境遇を見れば一目瞭然ではないか。

「東京物語」の背景は広島・尾道-東京間の交通が蒸気機関車で約15時間を要し、日本人の多くが一家の生計を成り立たせるため時間を惜しんで懸命に働いた時代で、尾道に住む老夫婦が東京で町医者をしている長男と美容院を営む長女を訪ねて行き、その旅行から帰った直後に老母が急逝して家族が尾道に集まり葬儀の終了後まで、戦死した次男の嫁で血がつながっていない紀子（原節子）が、実の子どもたちよりも義理の老父母に深い思いやりを示す……という話である。

この映画は日本の伝統的な家族が崩壊していく将来を予見した作品として語られてきたが、この点では小津の見通しが的中していたとはいえない。新幹線の出現とメールの普及で、東京と地方に別れて暮らす家族の距離は前よりずっと縮まっていると思われるからだ。本当の主題はそこにはない。老父（笠智衆りゅうちしゅう）と老母（東山千栄子）と紀子との間で結ばれる**相手への思いやりの深さと優しさ**が、時代と国境を越えて普遍的な共感を呼ぶのである。

東京で老母が一人だけ紀子のアパートの部屋に泊まったことがあり、葬儀が済んだ後、老父がその夜を話題にして「あんたみたいなええ人アない言うて、お母さんもほめとったよ」と言うと、紀子は「いいえ。わたくし、そんなおっしゃるほどのいい人間じゃありません」と否定して内心に秘めた複雑な気持ちを語り出す。見かけは完璧のように振る舞っていても、心の底では人に言えないさまざまなことを考えている「ずるい」人間なのだ……と。

日本の女性の理想像のように描かれてきた紀子が、その告白によってより**温かみのある豊かな人間像**に変わる。

「晩春」「麦秋」「東京物語」の紀子三部作は、いずれも優劣をつけ難い秀作ぞろいだが、私もやはり「東京物語」を

最高傑作とするのは、外国人をも魅了する稀有（けう）の美貌と無類の人間味を兼ね備えたヒロインを演じられるのは原節子のほかにいるはずがないと考えるからだ。

地上に混乱と紛争が続く限り、平凡な日常の繰り返しこそが人間の非凡な幸せと説く「東京物語」の原節子を、世界が忘れることは決してないだろう。

おさべ・ひでお

作家。1934年生まれ。「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」で直木賞。著書多数。映画をこよなく愛し、エッセー「紙ヒコーキ通信」を長年執筆。89年には「夢の祭り」で原作・脚本・監督を担当した。